

# ヴェサリウスの父アンドリエスの、神聖ローマ皇帝カール五世による嫡出承認書

日本医史学雑誌第五十二巻第二号 平成十七年十月 三日受付  
平成十八年 六月二十日発行 平成十八年二月二十四日受理

泉 彪之助  
介護老人保健施設 陽翠の里

〔要旨〕ヴェサリウスの父で皇帝カール五世の宮廷薬剤師であったアンドリエス・ファン・ヴェセーレは、ハプスブルク家の侍医エヴェラルト・ファン・ヴェセーレの非嫡出子であったが、一五三一年、皇帝によって嫡出と認定された。嫡出承認書はフランス語で書かれている。著者は、この承認書を翻訳し、その内容を知ろうと試みた。

この承認書によって、アンドリエス自身が嫡出と認定されただけでなく、彼の後継者がアンドリエスの地位を継承することが認められた。この承認書によって、アンドレアス・ヴェサリウスは、ハプスブルク家の宮廷に代々世襲職として仕えた家の一員としての地位を認められ、その結果、宮廷侍医としての経歴を開始することができた。

キーワード——ヴェサリウス、アンドリエス、カール五世、嫡出承認書

アンドレアス・ヴェサリウスは、「ファブリカ」の出版後、スペイン宮廷に入り、神聖ローマ皇帝カール五世およびその嗣子スペイン王フェリペ二世に侍医として仕えた。著者は、第一〇五回日本医史学会総会でその経緯について報告したが、スペイン宮廷に入った理由として、ガレノス解剖学を批判することになったヴェサリウスが、非難に対してカール五世に庇護を求めたのではないかとした。<sup>1)</sup>その後、ヴェサリウスは世襲職一家の一人として父の跡を継いだのではないかと考えるようになったが、その参考にヴェサリウスの父アンドリエスの、カール五世による嫡出承認書の内容を検討した。

## 一．嫡出承認書交付の経過と邦訳

ヴェサリウスの一家は、ハプスブルク家およびその縁戚のブルゴニユ公家と関係が深く、ヴェサリウスの高祖父ペーテル、曾祖父ヨハネス、祖父エヴェラルトの三代にわたって、両家の侍医として勤めた。しかし父アンドリエスは、祖父エヴェラルトとマーガレット・スウインターズの間に生まれた庶子で、そのためか医師でなく薬剤師であった。<sup>3)</sup>アンドリエスは、嫡出と認めていたきたいという請願書をカール五世に提出し、一五三一年十月にカール五世から嫡出と認定され、この嫡出承認書を交付された。アンドリエスは、以後エヴェラルトの実子として取り扱われることになった。

バロンは、この嫡出承認書の原文テキストを著書に掲載している。<sup>4)</sup>原本は王国公文書館に保存された史料をDumontが編纂刊行し、それを Wauters が引用したものを、バロンが再引用したものとされる。王国公文書館はベルギー王国のそれかと思うが、ネーデルラントの支配権はたびたび変わっているので、カール五世のフランドル宮廷における公文書がどのように保存されてきたか著者には知識がなく、確実ではない。Wauters はブリュッセル

ル市の公文書管理官 (Archivist) で、十九世紀の終わりに、ヴェサリウスの家系に関する文章を発表した。<sup>(5)</sup> ここでは、原文テキストの注あるいは文献出所をそのまま左記に記載する。

嫡出承認書原文テキスト脚注：

Dumont. Fragments généalogiques. t. VI, pag. 48. cit. por Wauters loc. cit. pag. 53

嫡出承認書原文テキスト文末：

Registre de l'Inventaire imprimé de la Chambre des comptes n° 163, f° 390, aux Archives de Ruyssme

このテキストはフランス語で書かれているが、その解読を試みた。第一〇六回日本医史学会総会では著者が訳した試訳を提示したが、座長小林晶博士がこの原文テキストにスペイン語的な偏りがあることを指摘し、また試訳に不十分な点があるところから Philippe Syster 氏と協力して新たな訳を作成し、これを著者に恵与された。<sup>(6)</sup> ここでは小林博士の許可を得て両氏が作成した邦訳を示す。ただし一五三一年を「帝国第二年、スペイン・二つのシチリアその他の支配地における第一六年」とした点は、泉の解読を残した。

〔ヴェサリウスの父アンドリエスの、皇帝カール五世による嫡出承認書邦訳〕

朕は出席者および将来関係する者へ次のことを告知する。

朕は愛する侍者・薬剤師であるアンドリス・ヴェザルからのつつましい請願書を受け取った。彼はエヴラール殿の庶出・非嫡出子で、エヴラール殿は（こういうことを言うのを許されれば）朕の思い出の中で大切にしている、朕の祖父マクシミリアン皇帝の医師、顧問、侍医であった。

アンドリスは当時未婚の前述のエヴラール医師とマルグリート・スウインターズの間にも生まれた。朕は請願者が非常に正直で、礼儀正しく、話して楽しい人であると思っている。彼は朕に仕え朕のもとで生活することを望んで

いる。彼は自分を嫡出子にしてもらって、出生の欠陥を除いていただきたいと、つつましく請願している。

朕は前述の事項を熟慮し、友人、臣下の者、財務大臣などに意見を徴し、皇帝の天賦の問題として、あるいは神が皇帝に許された権威と恩赦によって次のようにした。すなわち

一・ アンドリスを嫡出子とする。

一・ 朕の皇帝としての特権によって、出生の欠陥を書類上抹消する。

一・ 嫡出子として次の権利を与える。1. 近親者が同意し、第三者が既にこの権利を得ていなければ、両親の遺産の相続、2. 得られた、あるいはこれから得られる財産の所有者である、3. 僧院、教会の所有物になつていなければ、相続人への遺書によって、これらの財産を自由にできること、

一・ 社会的地位、称号を取り、責任を持つことを命じる。この場合、世俗教会の法的行為の中で、今後は合法的結婚後の子であるとして考えてゆくこと、近親者も彼の死後、正当な嫡出子と考えて相続すること、を命じる。また、朕および朕の後継者は将来に亘つて、これまでの法律、習慣、すなわち私生児の財産は皇帝によって没収されるような権利は要求しない。

一・ 嫡出子として認められた代償は、朕のもとで今後も侍者、薬剤師として働いてくれれば、一切求めない。朕は今後も財務担当者あるいはこれまでの慣習によって、何らかの制約が生じれば、それを免除する。

朕は前述のアンドリスにかなる損害も与えたくないので、この書類によって支払いを免除する。ここにこの命令を發布する。

一五三一年一〇月、帝国第二年、スペインおよび二つのシチリア、その他の支配地において第一六年、朕の都ブリュッセルにおいて交付。

この書類の折り目の上に「皇帝によって」と書かれ、L. du Bioulとサインしてある。

文中、帝国第二年は一五三〇年のポローニアにおける皇帝戴冠から、第一六年は一五一六年の母方の祖父アラゴン王フェルナンドの死去による王位継承から起算している。神聖ローマ皇帝の就任は、選帝侯会議による選出、アーヘンにおける戴冠、ローマにおけるローマ教皇による戴冠、の三段階によるが、カール五世はいわゆるローマの略奪(一五二七年)のためローマで戴冠できず、教皇クレメンス七世によってポローニアで戴冠した。またカール五世は、フェルナンドからシチリアを含むアラゴン・カタルーニア連合王国の支配権と、祖母カステイリア女王イサベルが死去に際して夫フェルナンドに委譲したカステイリア王国の支配権とを受け継いだ。<sup>(9,11)</sup>二つのシチリア(Deux Siciles)という言葉の意味は明らかにできなかったが、小林晶博士はシチリア王国、南イタリア王国(ナポリ王国)であろうという。<sup>(6)</sup>

邦訳に見るように、この嫡出承認書の主な内容は、次の通りである。第一は、この承認書が、カール五世の宮廷における奉仕を続けたいという理由で、アンドリエスがカール五世に嫡出認定を願い出た請願書に応えたものであること。第二は、アンドリエスの庶出を明記した上で、恩典によって嫡出と認めるとしたこと。第三に、アンドリエスに両親の地位と財産の継承・相続権を認めていること。第四に、アンドリエスの後継者がアンドリエスの地位と財産を継承・相続できるとしたこと。第五は、この嫡出承認書の交付に対して宮廷の側から対価を求めることの否定、である。

## 二. エヴェラルトとアンドリエスの経歴

アンドリエスの祖父、つまりヴェサリウスの曾祖父ヨハネスは、一四〇〇年代早期に出生。医師でルーヴァン大学教授となり、また父ペーテルの跡をついでハプスブルク家のマクシミリアンの侍医となり、ブルゴーニュ公国シャル

ル突進公、マリーの侍医も勤めた。<sup>(3)(12)</sup> シャレル突進公は一四三三年に誕生、一四七七年に死去。<sup>(13)</sup> マリーは一四五七年に誕生、一四七七年にマクシミリアンと結婚、一四八二年に死去。<sup>(13)(15)</sup> マクシミリアンは一四五九年に誕生、一五一九年に死去。従って一四七六年に死去したヨハネスは、侍医として仕えた君主たちより早く亡くなったことになる。

ヨハネスは、二回結婚した。最初の妻はマチルダ・ファン・エリックで、四人の子供が生まれ、長男がアンドリエスの父、すなわちヴェサリウスの祖父エヴェラルトであった。<sup>(3)</sup> 従って、エヴェラルトがヨハネスの跡を継いだのは順当である。

エヴェラルトは、一四八五年に三六歳で死去したといわれるので、出生は一四四九年ごろになる。やはり医師で、父の跡をついでマクシミリアンの侍医になり、妻マリー、長男フィリップ、長女マルガレーテの侍医も勤めた。<sup>(3)(12)</sup> フィリップは一四七八年誕生、一四九六年結婚、一五〇六年に死去。マルガレーテは一四八〇年に出生、一五〇六年ネーデルラント総督、一五一六年辞任、一五三〇年死去。<sup>(9)(15)</sup> 前記の各君主の経歴からすると、エヴェラルトに先立って死去したのはマリーのみである。エヴェラルトが亡くなって後、ヴェサリウスの一家には医師がいなかったため、ヴェサリウスまで侍医となるものはなかった。

アンドリエスの母親マーガレット（邦訳：マルグリート）・スウインターズは、名前から見ると英国人と思われるが、どのような女性であったか不明である。エヴェラルトの家庭生活についても明らかでない。オマリーは、エヴェラルトの職歴や兄弟についてのべているが、エヴェラルトの家庭については記載していない。<sup>(12)</sup> Wauters の論文を見ていると思われるオマリー、バロン両者ともエヴェラルトの家庭生活について言及していないところを見ると、エヴェラルトは結婚せず、マーガレット・スウインターズは内縁の妻であった可能性が大きいのではないかと思われる。

ヴェサリウスの母イサベル・クラツペを英国人とした文献があるが、あるいはこのマーガレット・スウインターズと混同したものであろうか。

嫡出承認書では、アンドリエスは父エヴェラルトの地位と財産の継承・相続を認められている。ここで地位の継承というのは、いわゆる「家を継ぐ」ことを示す。アンドリエスがそのような立場を認められていることは、すくなくとも嫡出承認書交付の時点で、エヴェラルトに地位を継承すべき実子がいなかったことを示しているのではないだろうか。もしそうした推定が正しければ、アンドリエスは庶子という身分ではあるものの、実質上はエヴェラルトの後継者であったことになる。そのために、このように公に嫡出と認定されることが可能であったのではないかと思われる。

ヴェサリウスの父アンドリエスは、一四七九年ごろ、エヴェラルトを父と、マーガレット・スウィンターズを母として出生、薬剤師となり、イサベル・クラツベと結婚。一五一四年にヴェサリウスが生まれた。バロンによれば、このころネーデルラント総督マルガレーテの宮廷薬剤師であったという。後にカール五世の宮廷薬剤師となり、一五一七年、カール五世の初めてのスペイン入りに随行。一五三八年、カール五世がニースへ赴いたときにも随行。ちやうどその時に出版されたヴェサリウスの『解剖学図譜』をカール五世に献上した。一五四三年に死去。

カール五世の宮廷におけるアンドリエスの地位について、嫡出承認書では“varlet de chambre et appoticairre”<sup>4)</sup>、ヴェサリウスの宮中伯認可状では“cubiculis et pharmacis fuit”<sup>17)</sup>となっている。varlet (vale) de chambre は、邦訳では「侍者」としたが、現代フランス語の辞書では「召使」となっている。cubiculis のもとの言葉 cubicularius の意味は、近侍、従者、servant of the bed chamber である。オマリー邦訳では給仕となっているが、もう少し上の地位であろう。しかし薬剤師を兼ねた下級侍従であったことは確かで、医師・顧問官・侍医とされたその父エヴェラルトに比べて、低い地位であったことは間違いない。エヴェラルトの庶子であったために、このような地位に甘んじなければならなかったわけで、それを克服するために請願したものと思われる。

もつともアンドリエスの父エヴェラルトは一四八五年に死去しているので、アンドリエスは六歳ごろに父を失っ

たことになり、仮に庶子でなかったとしても生活は楽でなかったろう。アンドリエスが医師になれなかったのは、あるいは父の早世に関連しているかもしれない。

ここで一五三一年一〇月という嫡出承認書の日付に注目したい。アンドリエスがハプスブルク家の宮廷に入った日時は確実でない。ヴェサリウスの宮中伯認可状には、「アンドリエスが三〇年以上も (ultra triginta annos)、侍者および薬剤師であつた」となっている。これから換算すると、アンドリエスは一五四三年に亡くなっているので、勤務を始めたのが一五〇四年から一五二三年の間ということになる。カール五世の父フィリップ美公が死去し、マルガレーテがネーデルラント総督の地位についたのは一五〇六年である。どの文献にも、アンドリエスがフィリップ美公の宮廷薬剤師であつたとしているものがないので、宮廷に入ったのが一五〇六年以降か、あるいは最初皇帝マクシミリアンのインスブルックの宮廷に勤務したものであろう。もし前者とするなら、マクシミリアンの宮廷薬剤師であつたという記載は、マルガレーテのいたネーデルラントを訪れたマクシミリアンにも仕えたものと考えられる。オマリーは、マクシミリアンの名を出さず、マルガレーテとカール五世の宮廷薬剤師として<sup>(12)</sup>いる。また後者とするなら、アンドリエスは二五歳ごろから宮廷に勤務していることになる。侍者および薬剤師という職務からはやや若いようにも思えるが、宮廷勤務中に薬剤師としての徒弟修業を行った可能性もあり、否定はできない。

前述のように、バロンは、ヴェサリウスが生まれた一五二四年には、アンドリエスはマルガレーテの宮廷に仕えていたとしている。カール五世が始めてスペイン入りした二五一七年には、アンドリエスはカール五世に随行した<sup>(13)</sup>。従つて宮廷勤務の開始から嫡出承認まで少なくとも一七年乃至一四年の間があり、それにはなにか理由があるのでないかと想像される。宮廷勤務開始早々、このような請願を行ひ得ないことは当然だが、宮廷にある程度受け入れられた後でも、このような請願を行うには、なんらかのきっかけがあつたであらう。



### 三. ヴェサリウスの経歴との関連

この嫡出承認書が下付された一五三二年には、ヴェサリウスは一七歳で、前年にルーヴァン大学に入学していた。<sup>12</sup> ヴェサリウスの上には長男ニコラスがいたが、アンドリエスはこれまでの成績からヴェサリウスの卓越した才能を認め、将来自分の地位を継がせたいとこの請願を行ったものではないだろうか。

ヴェサリウスの医学史上の貢献があまりにも偉大であるため、スペイン宮廷時代の生活はほとんど無視されて来た。しかしヴェサリウスが解剖学に専念したパドヴァ大学時代は約七年であるのに、スペイン宮廷では二〇年の歳月を送っている。ヴェサリウスの人生進路では、スペイン宮廷における期間の方が重要ではなかったろうか。そしてそれは、ヴェサリウスが世襲職一家の一人として選び取った進路で、ヴェサリウスが解剖学者としてではなく医師として生きた道ではないだろうか。嫡出承認書の中でアンドリエスの後継者がその地位を継ぐことを承認されたことは、ヴェサリウスが世襲職一家の一員として生きるという立場が固まったのではないかと想像される。

坂井建雄は、ヴェサリウスがカール五世の死後、一旦年金などを受け、フェリペ二世の懇請によって再び侍医の職に就いたとしているが、<sup>20</sup>もしそうした史実があったならば、それは世襲職といいながら君主にとつても廷臣にとつても選択の余地のある、余裕をもった関係であったことを示すものであろう。

### 四. 嫡出承認書の言語

この承認書の言語について付言する。ヴェサリウスの宮中伯認可状は、神聖ローマ帝国の法律による正式の任命であるためラテン語で書かれている。これに対して、この承認書は、皇帝の宮廷内における処置としてフランス語

で書かれているが、十六世紀の中期フランス語<sup>(21)(22)</sup>で、現代フランス語と異なっている。試訳には多くの問題があったので、ここでは小林晶博士による新訳を示した。

山本文彦が述べているように<sup>(23)</sup>、言語の相違を国制の理解の根拠とすることは問題があるだろう。しかしここで、第一次ドイツ帝国と理解されてきた神聖ローマ帝国の内部文書である嫡出承認書が、ドイツ語でなくフランス語で書かれていることに注目したい。

謝辞・嫡出承認書邦訳を恵与され、種々ご指導いただいた小林晶博士、邦訳作成に協力された Philippe Syter 氏に深謝する。

(この論文の要旨は、平成一七年六月、第一〇六回日本医史学会総会において発表した)

#### 参考文献

- (1) 泉 彪之助「スペイン宮廷のヴェサリウス(抄録)」『日本医史学雑誌』五〇巻一号、四〇—四一頁、二〇〇四
- (2) 泉 彪之助「スペイン宮廷のヴェサリウス」『日本医史学雑誌』五〇巻四号、五九一—六一六頁、二〇〇四
- (3) José Barón Fernández: Andrés Vesalio, Su Vida y Obra (アンドレアス・ヴェサリウス、その生涯と業績), Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid, 1970
- (4) 文献 (3) 二八一—二八二頁
- (5) Wauters, A.: Quelques mots sur A. Vesale, Memoires couronnes, T. LV, pagé 22, Bruselas, 1898, cited by Barón
- (6) 小林晶：私信
- (7) ピーター・H・ウィルソン著、山本文彦訳『神聖ローマ帝国一四九五—一八〇六』、岩波書店、東京、二〇〇五
- (8) 菊池良生『神聖ローマ帝国』、講談社現代新書、一〇〇三

- (9) 江村洋『カール五世、中世ヨーロッパの最後の栄光』、東京書籍、東京、一九九二
- (10) ジュゼッペ・クアトリエーロ著、真野義人ら訳『シチリアの千年』、新評論、東京、一九九七
- (11) 田澤 耕『物語カタルニアの歴史』、二二二—二二三頁、中公新書、二〇〇〇
- (12) チャールス・D・オマリー著、坂井建雄訳『ブリュッセルのアンドレアス・ヴェサリウス 一五一四—一五六四』、エルゼビア・サイエンス ミクス、東京、二〇〇一
- (13) ジョセフ・カルメット著、田辺保訳『ブルゴーニュ公国の大公たち』、国書刊行会、東京、二〇〇〇
- (14) Church of Our Lady-Bruges, 20p, Verlag 'Thil' S.A. Brussels, 2001
- (15) 江村洋『中世最後の騎士—皇帝マクシミリアン一世伝』、中央公論社、東京、一九八七
- (16) 『ファブリカ』序文に於て Andreas Vesalius: On the Fabric of the Human Body, Book I The Bones and Cartilage, (transl. by W. F. Richardson), Norman Publishing, San Francisco, 1998. xlvii—lviii 頁
- (17) 文献 (3) 二七五—二八〇頁
- (18) 田中秀央編『羅和辞典』、研究社、東京、一九九四
- (19) Glare, P.G.W. ed. Oxford Latin Dictionary, Oxford University Press, Oxford, 2000
- (20) 坂井建雄『謎の解剖学者ヴェサリウス』、筑摩書房、東京、一九九九
- (21) 町田健『フランス語の歴史』、『言語学大辞典、第三巻』、七九二—八〇二頁、三省堂、東京、一九九二
- (22) 島岡茂『フランス語の歴史』、大学書林、東京、一九九三
- (23) 山本文彦…文献 (7) 二九頁、訳注

## Legitimation of Andries van Wesele, Andreas Vesalius's Father, by the Holy Roman Emperor Charles the Fifth

Hyonosuke IZUMI

Andries van Wesele, Andreas Vesalius's father and a court pharmacist of the Holy Roman Emperor Charles the fifth, was an illegitimate son of Everard van Wesele, a court physician of the Hapsburgs. In the year of 1531, Andries was legitimated by the Emperor. The legitimation letter was written in French. The author tried to translate and analyze the letter.

By this legitimation, not only Andries himself was legitimated but also his successors were approved to succeed Andries. By this letter, Andreas Vesalius obtained his position as a hereditary member of a family serving the court of the Hapsburgs, and as a result, he started his career as a physician of the court.